

## エコミュージアム えこみゅーじあむ ecomuseum

エコミュージアムとは、ある一定の地域全体で博物館活動を行なっていくことで、フランス語で命名された言葉 (écomusée) の英語訳 (ecomuseum) として世界に普及している言葉だが、日本では「地域まるごと博物館」「生活・環境博物館」などとも呼ばれることもある。すなわち、地域に点在する有形無形の文化財や史跡、自然環境、産業遺産など、地域のさまざまな資産を、統合的にあるがままにあるいはより良い状態に保全し、住民自ら調査研究し、保存しかつ展示、学習していくことである。

1960年代末頃、世界各地で同時多発的に試みられ始めていた動きとして、博物館が宮殿のように権威的で閉鎖的な殿堂として存在する建物ではなく、地域コミュニティと深い関わりをもつことを基本理念とする活動（後にニュー・ミュージオロジーとして知られるような考え方に基づく）に対して、こ



【エコミュージアム関ヶ原】

27

2011年8月31日 初版発行

〔検印省略〕

## はくぶつかんがくじてん 博物館学事典

編者 全日本博物館学会

発行者 宮田哲男

発行 株式会社 雄山閣

東京都千代田区富士見 2-6-9

TEL: 03-3262-3231 / FAX: 03-3262-6938

URL: www.yuzankaku.co.jp

振替: 00130-5-1685

e-mail: info@yuzankaku.co.jp

印刷 ワイズ書籍

製本 協栄製本株式会社

製函 加藤紙器製造所

© The Museological Society of Japan 2011 ISBN978-4-639-02183-4 C3530  
Printed in Japan NDC069 p.421 28cm

れからの博物館の方向性を示すひとつのあり方として、1971年、ICOM（国際博物館会議）ディレクターであったド・ヴァリーン（Hugues de Varine-Bohan）によって命名された。公には同年のフランスICOM会議の席上で、当時のフランス環境大臣により提唱された用語であり、これは翌1972年に開催が予定されていた国連人間環境会議に対して博物館界からの表明として、エコロジーとミュージアムを組み合わせた造語として考案された名称であった。ド・ヴァリーンによれば、エコロジーの意味するところはヒューマン・エコロジーであり、対象は自然環境に限定されるものではなく、人間社会や生活と一体化した博物館活動を目指したものである。前ディレクターであったアンリ・リヴィエール（Georges=Henri Rivière）がフランス国内において熱心にこの構想の実現に取り組み、当初はフランス語圏を中心にカナダ、ポルトガルや中南米などに広がりを見せた後、現在では英語圏や北欧、東欧、アジア、アフリカにも広がりを見せ、ヨーロッパではイタリアを中心とした国際的なネットワーク活動などにより再び活発化の動きをみせている。

地域住民の意志と力により、生きた博物館として地域を学習し保全し、そして地域を自ら運営していく活動といっても良い。博物館施設にこだわらないため、組織実体の無い活動を自称するものもあり、定義や概念が混乱しているのが実情でもある。

従来一般的な博物館とエコミュージアムとを比較したりヴァード（René Rivard）によると、博物館活動の3つの要素、つまり活動の行なわれる場・容器・構造（スケルトン）、活動の対象・内容、それに関わる人間・博物館活動の主体と客体、のそれぞれは、以下のように違う。つまり、従来型の博物館＝〈建物〉＋〈収集品〉＋〈専門家＋公衆〉であるのに対し、エコミュージアム＝〈領域〉＋〈遺産＋記憶〉＋〈住民〉となる。すなわち、従来の博物館のような建物だけで博物館活動がおこなわれるのではなく、ある一定の地域の領域において、地域に点在する遺産や無形の記憶を対象とし、一般の博物館内部の学芸員と公衆の両者の役目をエコミュージアムでは地域住民が担うというものである。エコミュージアムの特徴は、地域環境を統合的に対象とすることにより総合的、学際的であること、それに加えて、地域住民が互いに教える役割にも教わる立場にもなる学び合いの場として機能すること、またエコシステムの一員として博物館活動の中に組み込まれていることにある。つまり、地域で博物館活動を進めることと住民自ら地域の生活文化を豊かにすることと目的をひとつにしようとするものである。

28

エコミュージアムという言葉は定義づけが難しく、地域の形態に応じた実にさまざまな活動であるため、誤解されることも多い。活動する地域の事情によっては重点を置くところが異なり、博物館関係者の不在のもと、地域づくりと同様に捉えられていることも少なくない。しかし、根幹となる理念は博物館学にあり生涯学習の場づくりという本来の機能がさらに重要視されることこそ当面の課題であり、かつ、今後のエコミュージアムの好ましい展開と言える。

▽大原一興『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会、1999  
（大原一興）